



Title	貧困を生きる：ブラジル路上商人の「正しさの規範」と「善さの規範」
Author(s)	奥田, 若菜
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59337
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	おく だ わか な 奥 田 若 菜
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）
学 位 記 番 号	第 2 5 3 0 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	貧困を生きる：ブラジル路上商人の「正しさの規範」と「善さの規範」
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 中川 敏 (副査) 教 授 小泉 潤二 教 授 栗本 英世 准教授 森田 敦郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論ではブラジルの路上商人を事例に、彼らが生きる二つの規範を考察した。

路上商人たちは、二重の規範を生きている。路上市場での労働を通じて社会的経済的上昇を目指す個人主義的行為と、厳しい生活のなかで相互に助け合う共同体主義的行為である。本論では彼らの二つの規範を、リベラル・コミュニタリアン論争の用語から「正しさの規範」と「善さの規範」とする。「正しさの規範」と「善さの規範」はそれ自体が、明確な規範領域をもつものではない。二つの規範は主体や行為、場のそれぞれの関係性のなかで作り出されるものであり、状況に応じて変化しうる。規範がどのように主体や行為によって確認され、どのような場で再構成されていくのか、民族誌的なミクロな記述から考察した。

二つの規範の前提となるのが、「貧困」である。路上商人にとって、「貧困」やネセシダージ（窮乏・必要性）こそが二つの規範を生きる前提であり、彼らの日常の中心にある。本論で論じる路上商人たちの直面する貧困は、社会的な「構築物としての貧困」である。路上商人たちは、ブラジル社会全体から「貧困者」と位置づけられ、彼ら自身もそれを自認する。その意味において、彼らは貧困者として貧困世界を生きている。貧困を内面化した彼らは、ポブレ（*pobre*「貧困者」）からいかに抜け出すか、もしくはポブレとしていかに生きるかを常に考え、行動する。ここには当事者の語る構築物としての貧困が存在する。

路上市場には二つの側面がある。労働の場としての路上市場は、マーケット・エコノミーの領域である。市場経済の場であるフーア（*rua*「路上」）では、働き者としての正しさが重視される。ポブレ（貧困者）を自認する路上商人は、マーケット・エコノミーとしての市場で、ポブレから脱してヒコ（*rico*「金持ち」）になることを目指す。彼らは正しい労働に基づいて得る「汗をかいいたカネ」を稼ぐことで、貧困からの脱却を試みる。

助け合いの場としての路上市場は、モラル・エコノミーの領域である。共同体志向のカーザ（*casa*「家」）では、もてなす者としての善さが評価される。モラル・エコノミーと

しての市場では「我われ善いポブレ」として助け合い、ヒコとの差別化を図る。この規範に基づいてやりとりされるのは、相互扶助のための「伸びるカネ」である。

路上市場で働く路上商人たちは、市場交換／フーアと贈与交換／カーザという二つの領域を行き来する。路上市場で働くことによってカネを稼ぎ、経済的社会的に上昇することを目指す一方で、故郷北東部の善さの規範も彼らの中にある。「ポブレ」から脱しようと働く一方で、「我われポブレ」の善さから完全に抜け出すこともない。

「正しさ」と「善さ」の二つの領域は、矛盾することなく彼らの生活の中にある。二つの領域は使うべき場面が決められている。市場交換の場面で贈与交換を執拗に求めているけなしいし、贈与交換の場面で等価交換を頑なに主張することは批判を呼ぶ。第五章では、「ねだり」「邪視」「物乞い」を事例に、二つの規範がぶつかり合う場面で生じる困惑を考察した。1つめの事例は、ある少女のねだりである。「働き者」であることを推奨する「正しさ」の場において、少女は「善さ」の関係にある顔見知りモノをねだる。二つの領域を交錯させる少女の行動は批判される。2つめは、邪視持ちである。邪視持ちは直接的にモノを要求する言葉は明言せずに、他人の所有物が羨ましいと表明する。邪視持ちは共同体の「善さ」に則して他人が「汗をかいて」得た所有物を要求する。それに対して所有者は、「正しさの規範」に則って「働け」と突っぱね、邪視持ちの要求を拒絶する。

少女のねだりも邪視も、二つの領域を混同したとして批判され、拒絶される。少女は、1) カネを儲けるはずの場所（労働の場）で贈与交換を相手に求め、2) カーザ領域の相手から得たカネを、紐帯をつくるために用いずに市場交換のカネとして受け取ろうとする。相手には贈与交換として要求しながら、少女自身は市場交換のカネとして用いようとするのが、少女のねだりである。行為を行う領域と、得たカネの使い方の両方で少女は「間違っている」。二つの領域を間違えて用いるため、少女は批判される。邪視持ちは、他人が「正しい」労働によって得た所有物に対して、「善さの規範」を用いて分けることを要求する。その要求は、再び「正しさの規範」に則して拒否される。

三つめの事例は物乞いである。物乞いは「正しさの規範」の路上市場で「善意」の施しを求める。この行為も二つの領域を混同するものであるにもかかわらず、先の二つの事例とは異なり、要求された側は明確に拒否することが出来ない。路上商人たちが物乞いの要求を明確に拒否できない理由は二つある。一つは、両者の社会的な近さ *propinquity* ゆえの「負い目」であり、もう一つは路上商人たちの「善さの規範」である。

物乞い業のみで家族を養えるほど「成功した物乞い」は、富裕地区で物乞いをするのではない。彼らはヒコ（金持ち）の集まる中心部ではなく、低所得者層ポブレのいる地域でのみ活動し、ときに路上商人を超える収入を得る。物乞いは、ヒコがいくら多くの余剰を持っていても、物乞いにはそれを贈与しないことを知っている。

不平等であることへの不安感、著しい経済格差がある二者間（ヒコとポブレ）よりも、類似した二者間（ポブレと物乞い）で強く生じる。「持ちすぎている金持ち」に対して路上商人が常日頃から感じている不平等感、物乞いに乞われたときに自身にふりかかる。路上商人たちが金持ちへ感じる不平等感よりも、目の前にいる物乞いと自分自身の不平等感のほうがより危機的である。路上商人たちは、「持たぬ者」が目の前に現れることで自分が過剰に持っているかもしれないという負い目を感じる。

故郷北東部の「善さ」を重んじる路上商人たちは、都市の市場原理に重点を置ききれな

いたために、物乞いの要求にはっきりとした態度を取ることができない。路上商人たちは物乞いに与える場合は「善さの規範」に沿って周囲に言い訳（なぜ与えたかの説明）をし、与えない場合は「正しさの規範」で言い訳（なぜ与えなかったか）をする。両方の規範をもつからこそ、どちらの場合でも言い訳が必要となる。路上商人から物乞いへ贈与が行われるのは、（両者の社会的近さだけが理由ではなく）都市へと移住した路上商人たちが競争原理のみに軸足をおかずに、二つの規範両方を持ち続けているためでもある。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ブラジルの首都ブラジリアの衛星都市、セイランジャの路上商人が生きている二種類の規範を描いた論考である。二種類の規範とは、一つはフーア、すなわち「路上」の規範、そしてもう一つはカーザ、すなわち「家」の規範である。

その規範の前提となるのが、彼女ら路上商人の置かれた「貧困」という状況である。第1章はまず「貧困」の学説史を解説する。その中で著者は二つの流れ、すなわち「貧困」をそこにあるものとして描く、いわば「実在派」と、「貧困」が社会的に構築されたものとして描く、いわば「構築派」を区別する。ブラジルで問題となるのは、歴史の中で構築されてきた「貧困」だ、と彼女は結論づける。つづいて、ブラジルの歴史の中で「貧困」がいかに構築されてきたのかを、多くの文献に基いて実証していく。

第2章において生き生きと路上商人の日常を描写した後、著者は第3章ではフーア、「路上」の規範、第4章ではカーザ、「家」の規範、そして第5章でその二つが葛藤する場面を描いていく。

「汗をかいた金」と題された第3章は、路上商人たちが従うフーアの規範、すなわち市場経済の中での「正しさ」の規範についての章である。この章では、勤勉で正しい「トラバリャドール」（労働者）として自らを律する路上商人の様子が、さまざまな民族的実事を用いて描かれる。彼女らは、ウェーバーの本の中に描かれるプロテスタントたちのような生真面目さをもって生業に従事するのである。著者は、それをカント経由のロールズの「リベラリズム」の議論に接木しながら理論的に読み解いていく。

「伸びる金」と題された第4章は、路上商人たちが、単に市場経済の規範、フーア「路上」の規範だけに従うだけでなく、しばしばモラルエコノミー的な「善さ」の規範、すなわちカーザ「家」の規範にも従って行動している様を描写することにあてられる。路上商人たちは相互扶助に基づく、一種の共同体志向の規範をも採用しているのである。著者は、それをサンデルに代表される「コミュニタリアニズム」の議論と重ねながら、理論的に読み解いていく。

二つの規範は文脈に応じて使い分けられる。しかし、しばしば路上商人自身がとまどうような規範のぶつかりあう場面が生じることがある。それが『『正しさ』と『善さ』がぶつかる時』と題された第5章、終章において記述される。取り上げられる事例は、「ねだり」、「邪視」そして「もの乞い」である。著者は、路上商人たちがどのような場面でもとまどい、どのようにして二つの規範の葛藤に決着をつけるのかを、細かな民族誌的事実を引きながら綿密に描写し、そして分析していく。

本論文は2年近くのわたる長期の、そして綿密なフィールドワークに基き、ブラジルの路上商人たちの日常に深く織り込まれた二つの規範をみごとに描き上げた労作である。

本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認める。